法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-15

The Merry Menにおける宝探しの挫折と歴史の発見

NAKAWA, Ayako / 中和, 彩子

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
言語と文化 / 言語と文化
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
73
(終了ページ / End Page)
86
(発行年 / Year)
2015-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010572

Hosei University Repository

“The Merry Men” における宝探しの挫折と歴史の発見

中 和 彩 子

1. 序

リアリズム小説の全盛期といわれるヴィクトリア時代であるが，1880年代以降，その反動のように「ロマンス」の復権が顕著に見られた[1]。少年向け冒険小説，そして宝探し物語の一典型といえる *Treasure Island*（1883）を書いた Robert Louis Stevenson はジャンルを代表する作家であり，H. Rider Haggard や Conan Doyle, Rudyard Kipling にも強い影響を与えた。

スティーヴンソンは，1880年代に盛んに行われた，小説の技法や作法や役割をめぐる議論における論客の一人でもあった。Henry James の “The Art of Fiction”（1884）への反論として発表した “A Humble Remonstrance”（1884）においては，自身の『宝島』を念頭に置きつつ冒険小説の定義を行っている。彼は小説を大きく三つの部門に分類したうえで，第一の「冒険小説」を「人の肉体的といっていいような性質や，きわめて非論理的な性向に訴える」(86)[2] 小説だとする。冒険小説は，人間の性格には必要以上には踏み込まず，危険な事件を扱うのを旨とする。「それ以外の特色を盛りこむこと，才気走ること，肉体感覚的な興味というキツネを走らせているのに同時に道徳的あるいは知的な興味というウサギを駆り出すこと，それは［冒険小説］を豊かにするのではなく台無しにする」(87)。ここで言及される「道徳的あるいは知的な興味」に対応する小説は，冒険小説以外の二部門にあたる[3]。スティーヴンソンは，このように，冒険小説を単純明快に定義するのだ。

スティーヴンソンは，同じエッセイにおいて「([ヘンリー・] ジェイムズ殿でもない限り)，黄金の探求をしたことのない子どもなど存在したためしがない」(86) と，誰もが少年時代に夢見たはずの冒険の筆頭に宝探しを挙げる。

Hosei University Repository

別のエッセイ，“A Gossip on Romance”（1882）においては，「真のロマンスの技法は，あらゆる事物をロマンスにする」（60）[4] と述べつつ，その好例として「［クルーソー］が難破船から回収する品の一つ一つが［読者には］『永遠の喜び』である」（60）ことを挙げ，「しかし貴重な発見物（treasure trove）すら，［扱い方によっては］退屈なものになりうる」（60; 強調は引用者）と，Wyss の『スイスのロビンソン』（英訳 *The Swiss Family Robinson*）をやり玉に挙げることにより，宝探しこそがロマンスの代表格であると暗に認めている。

『宝島』がスティーヴンソンの考える正統なロマンスであるとするならば，宝探しの挫折を扱う “The Merry Men”，宝探しの夢に踊らされる男を滑稽に描く “The Treasure of Franchard”，という二つの中篇小説が『宝島』の前後に創作されていることは，彼の宝探しのモチーフに対するアプローチの多様さを示している[5]。この二作は最終的に，*The Merry Men and Other Tales and Fables*（1887）の最初と最後を飾る作品として出版される。どちらも批評・研究の対象として取り上げられることが少なく，特に後者はほとんど知られていない作品といってよいだろう。*The Edinburgh Companion to Robert Louis Stevenson*（2010）の編者 Penny Fielding は，後述するように，その序文において「メリー・メン」と『宝島』との興味深い比較の視点を提供しているものの，それ以上踏み込んだ言及は見られない。

本稿では，「メリー・メン」において宝探しのモチーフがどのように用いられているか考察する。そのためにまず，物語の概要を押さえておこう。

2.「メリー・メン」梗概

作品は，Charles Darnaway という男性の語り手の回想形式をとっている。彼が振り返るのは，大学の課程を修了した夏にインナー・ヘブリディーズ諸島に属する小さな島で遭遇した恐ろしい事件である。Prince Charlie（1720–88）率いるジャコバイトの急襲の可能性がチャールズの頭をよぎり（348），また，Dr Robertson がエディンバラ大学学長職にあった時期（1762–92）であるという記述（329）から，1760 年代の話だと推測できる。

チャールズは 7 月下旬のある日，唯一の親族であるおじ Gordon Darnaway の所有し居住する Aros 島に向かう。島といっても，実は，より大きな島から突き出た Ross 半島の先端であり，干潮時には陸続きになる。

Hosei University Repository

アロスには二つの湾があり，おじの家は穏やかな北側のアロス湾に面しているが，深くえぐられた南の Sandag 湾は，船には危険な場所である。なぜなら，アロス南西の沖合には岩礁が立て込んでいる上，細く突き出た岬に，強い潮流の影響でできる，砕け波の長い帯が張りついているからだ。なお，岬の突端で特に激しく泡立つ砕け波は「陽気な男たち」(the Merry Men) の名で呼ばれている。

おじの使用人 Rorie の漕ぐ渡し船には，見慣れない美しい木材で改修された跡があり，「[家の] 内にも外にも数多くの変化が見られた」(331)。家具調度品，布類，食器，その他，質素な家には似合わぬ異国風の豪華な品々がむやみに並べられていたのである。おじの娘の Mary，そしておじの話から，それらは 2 月にサンダグ湾で難破した外国船からおじとローリーが回収したものだとわかる。

チャールズは毎年の休暇をここで過ごしていた。しかし今回の訪問には特別な目的が二つあった。一つはメアリーへの求婚。もう一つは，充分な結婚資金を得るために，サンダグ湾に沈没していると考えられる，金銀財宝を積んだ 16 世紀スペイン無敵艦隊の一隻 *Espirito Santo* 号を探すことである。求婚に対してメアリーは，2 月の難破以来精神に異常を来たしている父親のことを最優先に考え，今のままでいさせてくれと言って断る。

翌朝，チャールズはサンダグ湾の捜索に出かける。その途中で，2 月に砂浜に打ち上げられた外国船の残骸と，墓らしき盛り土を見かけて暗い気持ちになる。湾の見当をつけた辺りに二回潜ってみたが，財宝船らしきものは見当たらない。代わりに，比較的最近のものらしい靴のバックルと，人骨の一部を引き揚げてしまう。それらを手にして初めて「海という納骨堂の恐ろしさを痛感した」(346) チャールズは，「難破船の略奪品や死者の財宝にはもう指一本触れまいという強い決意」(347) をする。帰路，サンダグ湾の先ほど自分がいた辺りに数人の外国人が上陸しているのを丘の上から見つける。「昔の宝と無敵艦隊の沈没船を求めてやってきたスペイン人たち」(348) に違いない。

危険なよそ者が上陸したと知らせたときのおじの異様な反応から，チャールズは，例の墓は難破船からの一人の漂着者をおじが殺して埋めたものだと推理する。まもなく嵐の到来と満ち潮とが重なり，外国人たちが慌てて乗り込んだ船は危険な状態に置かれる。おじは船が難破するのを心待ちにし，興奮状態で丘の上から観察を続ける。悲惨な沈没のあと静かに夜が明け，おじは沈没船か

Hosei University Repository

らの漂着物探しに夢中になるが，一人の黒人（唯一命拾いした乗組員）が2月の難破船の上に現れるのを見ると，恐怖のあまり狂ったように逃げ出し，そのまま一人戸外で夜を明かす。

翌朝遅くチャールズが起き出してみると，ローリーがおじを家に連れ戻そうとして黒人に追わせていた。おじは，墓と難破船のある海岸に追い込まれると，それらを避けるように駆け抜けて，黒人とともに溺れてしまった。

3. 宝探しの冒険の挫折

前出の *The Edinburgh Companion to Robert Louis Stevenson* 所収の "Stevenson and Fiction" において Ian Duncan は，スティーヴンソンの主人公たちが動き回る「必ずといっていいほど人を欺く表層と外観とでできた［ロマンスの］世界」では「結局宝ではないと判明する宝，あると思われた場所にない宝」のモチーフが登場することになるのも当然だと述べる（Fielding 19）。

> 実際，それは，以下［の最晩年の作品］に至るまで，スティーヴンソンの小説における基本的なモチーフとなっている —— *The Master of Ballantrae*（地中に埋められた黄金の代わりに，息を吹き返し損なった死体が），*The Wrecker*（密輸された阿片の代わりに，皆殺しの物語が），そして *The Ebb-Tide*（シャンペンの代わりに水が。真珠の代わりに地獄堕ちが）。（Fielding 19）

主人公が財宝船の代わりに無価値の遺物を見つけてしまう「メリー・メン」は，上記の一連の作品の最初のものと位置づけることができる。しかし，「メリー・メン」には，スティーヴンソンのどの宝探し物語とも異なる特徴がある。それは，二種類の宝探しの存在だ。チャールズとそのライバルたちが一攫千金を狙って昔の財宝船を探しにサンダグ湾にやって来る数か月前に，おじは湾の岸に打ち上げられた難破船から「とびっきりの品物」（grand braws）（333）を回収しており，以来ずっと新たな難破船を待ち望んでいる。この二つの宝探しが交差することにより，宝探しのロマンスが台無しにされる。

おじの宝探しはロマンスとはほど遠い。スティーヴンソンが真のロマンスの

Hosei University Repository

例として挙げた『ロビンソン・クルーソー』において「難破船から回収する品の一つ一つ」(Stevenson, "Gossip" 60) がロマンスを構成するのだとすれば，ゴードンおじによって難破船から回収された品々は，もとからある物との不調和を読者に印象づけるためだけに数え上げられる。

> The garden was fenced with the same [foreign] wood that I had noted in the boat; there were chairs in the kitchen covered with strange brocade; curtains of brocade hung from the window; a clock stood silent on the dresser; a lamp of brass was swinging from the roof; the table was set for dinner with the finest of linen and silver; and all these new riches were displayed in the plain old kitchen that I knew so well, with the high-backed settle, and the stools, and the closet bed for Rorie; with the wide chimney the sun shone into, and the clear-smouldering peats; with the pipes on the mantelshelf and the three-cornered spittoons, filled with seashells instead of sand, on the floor; with the bare stone walls and the bare wooden floor, and the three patchwork rugs that were of yore its sole adornment — poor man's patchwork, the like of it unknown in cities, woven with homespun, and Sunday black, and sea cloth polished on the bench of rowing. (331-32; 強調は引用者)

この，コンマとセミコロンを多用する異様に長い一文は，「こういった新しいお宝がことごとく，わたしがよく知る質素な古い台所に陳列されていた」というコメントを挟んで前半が「お宝」の素っ気ないリスト，後半がもとからある物の，チャールズの思い入れある描写を交えたリストになっている。おじの得た宝は，「こざっぱりとして暮らしやすい」家への「不釣り合いな付加物」(332) でしかないというチャールズの思いを効果的に反映する一文によって，物語に導入されるのである。メアリーに至っては，それらが「海の底に沈んで，メリー・メンがその上で踊っていたらよかったのに」(332) と，強い嫌悪感を示す。

その直後におじが物語る難破の様子と宝の入手の顛末にも，チャールズは心惹かれず，話の途中で「全員助からなかったんですか」(334) と叫んで死者を

Hosei University Repository

悼み，また，おじの「声が不自然に震え，態度のほうも珍しく感情がむき出しになっている」(335) 異様さを気に留める。おじの「明らかにお気に入りとなっていたらしい話題」(334) は，ロマンスたることを許されていないのである。

おじの物語には重大な欠落があることが後にわかる。難破船のそばに作られている墓への言及が全くなかったのだ。しかし，チャールズはおじの言動から，その墓はおじが宝を手に入れるために唯一の生存者を殺して埋めたものと推理し，おじにその男の物語を突きつける。

> 「一人の男が，神の摂理で死の危険を逃れることを許されました。あわれな人間でした。裸で，びしょ濡れで，疲れていました。よそから来た男です。あなたの情けにすがる資格は十分あったんです。彼は地の塩であり，信心深く，有用で，親切な人間だったかもしれない。さもなければ，邪悪な行為を重ねてきた人間で，死は地獄の責め苦の入口だったのかもしれない。……」(360)

おじが明確な答えを口にしないため，チャールズの推理が当たっているのかどうかは不明であるが，ともかく，おじの物語がこのように補われることにより，難破船からの宝探しは非道な殺人にほかならないことになる。前述のペニー・フィールディングは，「メリー・メン」を「[『宝島』のような] 古典的な冒険物語を解体する物語」であるとし，おじの殺人により「宝探しのテーマが殺人的になる」と述べているが (Fielding 5)，むろん，『宝島』においても宝をめぐる争いの中で殺人は発生している。ただ，主人公たちの敵は例外なくならず者であり，殺さなければ殺されるという状況が作られているところが異なるのである。『宝島』において敵の排除はむしろ，主人公の冒険を冒険たらしめる要素であるのに対して，「メリー・メン」では，おじの宝の入手の邪魔になる人間が遭難者であるために，道徳的な問題が浮上する。そして，先に引用したスティーヴンソン自身の「ささやかな抗議」における明快な主張を俟つまでもなく，「道徳的な興味」(“Humble Remonstrance” 87) は冒険物語を台無しにする要素だ。

おじの二度目の「難破船からの戦利品」(359) の回収もまた，宝探しの醜悪なパロディだ。「子どものような熱心さで [岸辺の] 探検を遂行」するおじにとっては，「ただの壊れた板だろうが，索具の切れ端であろうが，命を賭して

Hosei University Repository

まで確保しなければならない宝（treasure）だった」(358)。しかしこの勇ましさは理性の欠如のあらわれである。チャールズは「七歳の子どもに付き添う乳母」同然におじに付き添い，「弱々しくおぼつかない足取り」にはらはらし，「取るに足りない発見物」の確保を手伝わねばならない（358)。海を極端に怖がって片脚が海水に浸かっただけで「断末魔の叫び」(358）を上げるほどなのに，小休止ののち宝探しを再開するほど宝に執着するおじは，「見つけた品々に満足しているくせに，自分の運の悪さをひっきりなしにぼやく」(359)。

> 「アロスという場所は」と彼は言った。「これっぽっちも難破向きじゃあない —— これっぽちもな。長年住んでいながらこれで二度目。しかも索具の一番いいとこはきれいさっぱり持っていかれちまって！」(359)

二度目の宝探しは，チャールズの語りにおいて子どもの冒険の体裁を与えられつつ，おじの欲望の醜さと倫理観の欠如を暴露するのだ。

おじのそれとは対照的に，チャールズの宝探しは本質的に冒険のロマンスに満ちたものだ。財宝船をめぐる土地の伝説や古文書の存在，普遍の価値を持つ莫大な量の金銀は，チャールズひとりだけでなく「外国の冒険者の一団」(348）をも当然のように引き寄せる。

しかしチャールズの宝探しも，おじの宝探しと関連づけられることにより，小説に「道徳的な興味」を呼び込んでしまう。宝探しの冒険は，宝の第一発見者がそれを正当に所有できるということを前提としている。つまり，『宝島』がそうであるように，倫理の棚上げなしには成立しないのである。その問題を興ざめなまでに明らかにしてしまうのが，この「メリー・メン」なのだ。

チャールズは，質素なおじの家が，難破船からの不釣り合いな贅沢品に汚(けが)されているさまを見て憤りを覚えるが，「自分がアロスに赴いた用向きを考えれば，［その感情には］言い訳も道理も立たない」と分析する（332)。チャールズの理想と野心に燃えた宝探しの企てが，おじの難破船からの品物の回収と本質は同じであることがここではっきりと示される。しかしチャールズは，自分の父親の遺産を引き合いに出して，死者から財産を受け継ぐのに良心の呵責を覚える必要はないという立場に回り（332)，また，宝は「学術界のために情報を求めているというよりは，自分のために財宝を求めている」，スペインから来た自称歴史家のライバルではなく，「メアリーとわたし自身，そしてこの地

Hosei University Repository

に根づいた由緒あるダーナウェイ家のほうを利するべきなのだ」(340-41) と闘争心を燃やす。ところが「気分も軽く」出発した「探検の旅」(341) の途上で難破船と墓に出くわすと，彼の気分は一転する。

> 船と墓，どちらのせいだったのかはわからない。ともかく，叩き壊された材木に片手でもたれて立つうちに，正邪の判断に鬱々とした迷いが生じた。異国の岸辺で難破して故郷を失った水夫たちはもちろん，命なき船までもが，わたしの胸を強く打った。そんな彼らの悲運から利益を得ようとするのは男らしくないさもしい行為 (un unmanly and a sordid act) のように思われた。そして自分が今手を染めている探求 (quest) が，本質的に冒涜的 (sacrilegious) であるように思えてきた。(343; 強調は引用者)

初めて宝の探求の倫理性という問題に直面したチャールズは，自分の冒険に「男らしくない」「さもしい」「冒涜的」という否定的な形容詞を冠せるのだ。しかし彼は，メアリーを妻にするために「しゃかりきになって働くのは自分の義務」であり，はるか昔に沈没した船の，「時の流れの中でかくも長きにわたって消滅していた権利や，かくも長きにわたって忘れられていた災難のことを考えるなんて気弱 (weak) ではないか」(343) と男性的な精神を取り戻して問題を棚上げにし，潜水による捜索に取り掛かるのである。

以上のように，チャールズの宝探しの冒険は，その目的が利己的ではなく，難破が現在とは無関係の遠い過去に起こっていると信じられる限りにおいてかろうじて成立するという性質のものだった。それを決定的に揺るがす契機が，チャールズが素潜りで海底を探索してたまたま掴んだ人間の遺物である。

一回目の潜水では「赤錆まみれの鉄製の靴のバックル」を引き揚げるが，「握りしめると持ち主［の船乗り］のことが，実際に目の前にしているかのように思い浮かんだ」(345)。彼には，船乗りが「わたしと同じように髪や血や物を見る目を備えた存在」であり，「わたしが卑劣に傷つけてしまった友人であるかのように」思われてならない (345)。それからチャールズは，バックルはスペインの無敵艦隊の財宝船ではなく，2 月に難破した外国船から投げ出された物なのだろうと結論する。

> ということは，世界の歴史の中でわたしと同じ時代を生きる人間，日々わ

Hosei University Repository

たしと同じニュースを耳にし，わたしと同じことを考え，ひょっとするとわたしと同じ聖堂で祈っていたりした人間が，ついこのあいだ買って身に着けていたバックルなのだろうか。(345; 強調は引用者)

チャールズがここで，単に溺死者に感情移入しているのではなく，彼と自分とをともに歴史上のある特定の時代を生きる人間として位置づけていることは重要だ。再び何とか勇気を奮い立たせて潜水したチャールズは，今度は人間の脚の骨を掴んでしまう。

墓，ブリグ型帆船の難破，錆の浮いた靴のバックルは，明々白々な告知だった。子どもでもそれらにまつわる陰惨な物語（dismal story）を読み取れたかもしれない。それなのにわたしはあの，人間の一かけらの現物に触れて初めて，納骨堂のような大海（charnel ocean）の恐ろしさを痛感したのである。(346; 強調は引用者)

「納骨堂のような大海」の底に下り立ったチャールズが見出したのは，「時の流れの中でかくも長きにわたって」(343) 忘却され，所有権もうやむやになっている財宝船ではなく，歴史上のある時期を生きた一人の人間が難破によって死んだという「陰惨な物語」である。その結果，彼は「溺死者たちの骨は向後，わたしの邪魔を受けずに転がっていなくてはならない」(346) と考え，「難破船の略奪品や死者の財宝にはもう指一本触れまいと」(347) 決意する。つまり，倫理的な問題を棚上げにしてかろうじて成立していた宝探しの冒険は，チャールズが海底に蓄積された遺物や遺骨の中からたまたま，一人の人間を具体的な歴史に属する存在として発見した瞬間に，不可能になるのだ。

ここで，チャールズがエディンバラ大学学長の歴史家，ウィリアム・ロバートソンに目を掛けられた学生という設定になっていることを思い出してもよいだろう。彼はロバートソン博士の命により「古い時代」の文書を整理し，価値のある物とない物により分け，「これらの［文書の］一つに，まさにこの〈エスピリト・サント〉号という船についての記録を発見した」(329)。その詳細な記録と，アロスに伝わる話を考え合わせ，彼は財宝船のありかを推定したのである。アーカイブに触れ，ある一つの文書を拾い出して財宝船に関する事実を再構成した歴史家チャールズは，海という納骨堂に触れたとき，ごくわずか

Hosei University Repository

な遺物を拾い出して一人の人間に関する事実を再構成する。

このことを踏まえると，チャールズが倫理的に問題があると考える宝探しを行うゴードンおじと「スペインの歴史家」のどちらも，チャールズとは逆に決して海の中に入ろうとしていないのは興味深い。おじは迷信的恐怖から海水に濡れることすら避けようとするし，目的地に到着したばかりの「スペインの歴史家」一行は岸辺から海を調べるにとどまる。

両者が歴史とは無縁の存在として設定されているのも，無視できない点だろう。おじの家の台所を見たチャールズは，「新しい（new）お宝がことごとく，わたしがよく知る質素な古い（old）台所に陳列されていた」(331-32) と憤りをこめて表現する。外国の珍しい品々を，あたかも〈驚異の部屋〉のように文脈を無視し，家の歴史も無視して陳列するおじは，歴史の一回性も認識していないかのように，サンダグ湾に人々が上陸したと聞かされたときに動転して「そいつは毛の帽子をかむっとったか」(349; 強調は引用者）と尋ねる。彼は，2月に（チャールズの推理では彼自身が殺して）墓に埋めた漂着者が，7月下旬の今，同じ場所に再び上陸したと考えるのだ。

また，「スペインの歴史家」は「[スコットランドの海で散り散りになって沈んだ] 無敵艦隊について調査する使命を負い，立派な推薦状を携えて［ロバートソン］学長のもとにやって来た」(340) が，実際にアーカイブの調査を行うのはチャールズだ。チャールズは彼を「[歴史家と] 自称する男」に過ぎないと考え，「山師／冒険家」(adventurer) (341) とも呼ぶ。これは，歴史家チャールズが冒険を断念したことと併せて，「メリー・メン」においては歴史の認識と宝探しが両立し得ないことを示している[(6)]。

以上のように，「メリー・メン」は，宝探しの冒険の要素をこれ見よがしに用いつつ，それに異なる文脈を与えていく。

4. 結　び

スティーヴンソンは1888年から1890年にかけて三回，それぞれサンフランシスコ，オアフ島，シドニーを出発地として南太平洋を周遊航海する。最後の旅の途中，「エリス諸島［ツヴァルの旧称］とニューカレドニアの間の海上にて」口述筆記させた手紙（S. S. McClure 宛，1890年7月19日付）において，スティーヴンソンは次のように述べる[(7)]。

Hosei University Repository

> 船はスティーヴンソン夫人［妻の Fanny］が収集した未開人のがらくた（barbaric trumpery）に埋まり，安物の槍はまとめて索具でくくって吊られています。船が横揺れするたびに，私は，鮫の歯でできた偃月刀が勢いよく飛び掛かって，私の生首をこしらえるのではないかと思ってしまいます。それに，キャビンを歩き回りながら［義理の息子］Lloyd に口述筆記させていると，行く手を Manihiki 島の太鼓に塞がれる。外側には虫除け粉を振りかけてあるが無駄な話で，内側はゴキブリがびっしり塊になっていることでしょう。（Booth and Mehew 6: 396; 強調は引用者）

「未開」の島々 ── 当時，地上の楽園として表象されがちであった ── で妻が収集した記念品に対するスティーヴンソンの軽蔑を，滑稽な口吻ながらよく表している一節だ。彼自身は，故郷の親戚や友人の作家 Andrew Lang には南海の工芸品をいくつか贈ってはいるものの，「訪れる島々で骨董品を入手する気持ちを起こすことはほとんどなかった」し，「［彼の］民族学的な資料の中に，モノ，つまり島々の物質文化の見本は全く含まれていなかった」のだ（Colley 90–91）。

『宝島』や *Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde*（1886）で著名な作家となっていたスティーヴンソンは，S・S・マクルーアの創立した新聞シンジケートのために南海便りを書く契約を結んで船旅に出たのであり，それらを旅行記としてまとめることも企画のうちに入っていた[8]。しかしスティーヴンソンは，ロマンス作家に期待されていたような南海体験記ではなく「南海全体を包括する人類学的，史学的な著作」（Rennie xxv）を目指していた。そして「誰もこれほどの材料を手にしたことはない」，「私ほどそれら［南海の文物，習慣］を数多く見たことのある者は，多くはない。もしかすると一人もいないかもしれない。素材を利用する能力がある者が一人もいなかったのは確かだ」[9] と自負するまでに，精力的に研究や取材を行う。しかしその執筆姿勢や，結果としての「便り」（Letters）の内容と体裁は，マクルーアや新聞編集長たちばかりか妻のファニーや文人仲間たちをも失望させてしまう[10]。たとえばファニーは，夫が「世界中でほかの誰も手にしたことのないほど魅力的な，［旅行記］のための素材を手にしているというのに，それを台無しにしようとしているのではないかと思う」，「［彼は］自分の［旅行記］を科学および歴史を扱った非個人的なもの（a sort of scientific and historical impersonal thing）にしなけ

Hosei University Repository

ればならない」と思い込んでいる，と不平をこぼしている[11]。またマクルーアは後年，「南海での観察が［スティーヴンソン］の中に目覚めさせたのは，ロマンス作家（romancer）としてではなく，道徳家（moralist）としての［彼］であった。そして，世間は，道徳家に対してロマンス作家に対するほどの興味を覚えなかったのだ」と振り返ることになる[12]。

以上のように，スティーヴンソンは南太平洋の島々での珍しい品々の収集や，そこでの自分の日々の体験の記録には価値を見出さなかった。代わりに，島々の現状を観察して，そこに至るまでの歴史を掘り起こすことに力を尽くすのである。その姿勢はあたかも，歴史を発見した瞬間から宝探しができなくなる，「メリー・メン」におけるチャールズの振る舞いをなぞっているかのようだ。

1890 年 2 月 14 日付の *Sydney Morning Herald* は，サモアへの定住を決めたばかりのスティーヴンソンへのインタビューを載せているが，その中にこのようなやりとりがある[13]。

> 「たぶん」と記者は言った。「南海での体験を，次の小説に生かすおつもりなのでしょうね？　ところで，〈宝島〉（Treasure Island）にはいらっしゃいましたか？」スティーヴンソン氏はおどけた笑いを浮かべた。「〈宝島〉は」と彼は言った。「太平洋にはありません……」

これに続けて彼は，〈宝島〉は西インド諸島に存在することになっていると説明してはいる。しかし南海周遊旅行がスティーヴンソンを歴史に向き合わせたことを踏まえれば，「〈宝島〉は太平洋にはない」という発言は，太平洋が彼の宝探しのロマンスの場ではないことを示し，歴史認識と宝探しの両立不可能性を象徴する発言として読める。念入りにも，スティーヴンソンは「しかしまじめな話をすると」と次に書かれる小説の構想を自ら持ち出す。

> 「……［それ］は “The Wrecker” という題になる予定です。太平洋の難破船（wreck）の経歴（career）についての物語です」
> 「難破船に経歴なんてものがあり得るのでしょうか？」
> 「確かにあります，この難破船にはあるのです」（強調は引用者）

ロイドとの共作として 1892 年に出版されたこの長篇小説においては，前出

Hosei University Repository

のイアン・ダンカンが触れているように，難破船の中に期待された膨大な量の阿片はそもそも存在せず，代わりに忌まわしい殺人の舞台であったという過去が判明する。宝はついに，初めから存在していないものとなり，宝探しの冒険は難破船をめぐる歴史の掘り起こしにすり替わってしまうのだ。

＊本稿は，法政大学国内研究（2010 年度）の成果の一部である。

《注》

（1） 本稿では「ロマンス」を E. ショウォールターの定義に従い，少年向け冒険小説と同義に扱う。ヴィクトリア時代の「ロマンス」の復権についてはショウォールター，第五章を参照。

（2） 以下，引用は，*Memories and Portraits*（1887）所収の版に基づく。

（3） 他の二つは，人間の知性に訴える「性格を扱う小説」(the novel of character)，堅い演劇と共通の主題を扱い，人間の情と道徳心に訴える「劇的な小説」(the dramatic novel）である（86)。

（4） 以下，引用は，*Memories and Portraits*（1887）所収の版に基づく。

（5） "The Merry Men" の執筆時期は 1881 年 6 月半ばから 7 月初旬にかけて (Booth and Mehew 3: 188n, 204, 212)。*Treasure Island* は 1881 年 8 月に執筆を始めて年内に完成（Booth and Mehew 3: 224; Letley xxvii-xxviii)。"The Treasure of Franchard" は，1882 年 7 月に執筆を始めて年内に完成（Booth and Mehew 3: 341n; Gray 42, xiv)。

（6） なお，チャールズの宝探しとその断念を描く第三章「サンダグ湾の陸と海」(Land and sea in Sandag Bay）は，作品完成前には，この章における歴史の重要性を強調するかのように「サンダグ湾の過去と現在」(Past and Present in Sandag Bay）と題されていた。W. E. Henley 宛，1881 年 7 月 3 日（頃）付の手紙（Booth and Mehew 3: 206）参照。

（7） 以下，スティーヴンソンの南海の物質文化への関心の低さについては，Colley 90-92 を参照。

（8） 以上の「南海便り」をめぐる事情については Rennie 参照。なお，それらをもとにした著作は，最終的には *In the South Seas*（1896 年）として死後出版された。また，派生的に書かれた *A Footnote to History: Eight Years of Trouble in Samoa* は 1892 年に出版された（Gray 114)。

（9） Sidney Colvin 宛，1889 年 12 月 2 日付の手紙（Booth and Mehew 6: 335)。

（10） Rennie xii-xxv 参照。

（11） ファニーの懸念については Rennie xii-xiii 参照。引用は，Sidney Colvin 宛，1889 年 5 月 21 日付の手紙（Booth and Mehew 6: 303)。

（12） S. S. McClure [and Willa Cather], *My Autobiography* (London, 1914), 192, qtd. in Rennie xxi.

Hosei University Repository

(13) インタビュー記事についての情報は Rennie xvi から得た。以下，記事からの引用は Terry 153 による。

引用文献

Booth, Bradford A. and Earnest Mehew, ed. *The Letters of Robert Louis Stevenson.* Vols. 3, 6. New Haven: Yale UP, 1994, 1995.

Colley, Ann C. *Robert Louis Stevenson and the Colonial Imagination.* Aldershot: Ashgate, 2004.

Fielding, Penny, ed. *The Edinburgh Companion to Robert Louis Stevenson.* Edinburgh: Edinburgh UP, 2010.

Gray, William. *Robert Louis Stevenson: A Literary Life.* Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2004.

Letley, Emma. Chronology. *Treasure Island.* By Robert Louis Stevenson. Oxford: Oxford UP, 1998. xxvii–xxix.

Norquay, Glenda, ed. *R. L. Stevenson on Fiction: An Anthology of Literary and Critical Essays.* Edinburgh: Edinburgh UP, 1999.

Rennie, Neil. Introduction. *In the South Seas.* By Robert Louis Stevenson. London: Penguin, 1998. viii–xxxv.

Stevenson, R. L. "A Gossip on Romance." Norquay 51–64.

———. "A Humble Remonstrance." Norquay 80–91.

———. "The Merry Men." Barry Menikoff, ed. *The Complete Stories of Robert Louis Stevenson.* NY: Modern Library, 2002. 325–368.

Terry, R. C. ed. *Robert Louis Stevenson: Interviews and Recollections.* Iowa City: U of Iowa P, 1996.

E. ショウォールター『性のアナーキー　世紀末のジェンダーと文化』富山太佳夫・永富久美・上野直子・坂梨健史郎共訳，みすず書房，2000 年．［原著 Elaine Showalter, *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siècle* (1990).］

（イギリス文学／国際文化学部教授）